高橋余一の「生活絵巻」

上の絵に書かれた文章

川合の八幡様の秋祭りや
祐泉寺の境内で
寄合角力大会が
よく催された

（これは川合の八幡様之図）

岐阜屋桜井政五郎さの行司
小栗小一郎さの呼出

角力取では太田の東、
恵比寿様など横綱格

※角力＝すもう

33 寄合相撲

明治時代から戦前まで、青年たちの間では素人相撲が人気でした。寺や神社の境内に土俵が作られ、仕事が終わると夜な夜な集まって練習をしていました。大正時代、素人力士は太田町で20人ほどいました。素人といえども、みんなまわしと化粧まわしを自前で持つほどでした。

大会は寺や神社の祭や学校の棟上げ式などでにぎやかに行われました。また、力士は大会があると聞くと、下呂や岐阜などの遠方へも出掛けて行きました。3人、5人と勝負を勝ち抜いていくごとに、当時の金額で、三円、五円と賞金が出ていました。

この時代、相撲は子どもたちにも人気で、学校から帰ると冬の寒い日以外は毎日のように、相撲を取って遊びました。子どもの相撲大会では桶や杓子などが景品でした。

生活絵巻の文中にある恵比寿様は、恵比寿山政太郎という名の力士で、張出大関という今の横綱にあたる一番強い力士でした。